

177 超音波断層法による胎児肝臓の計測に関する研究

島根医大

村尾文規, 高森久純, 秦 幸吉, 秦 利之,
山本和彦, 北尾 学

〔目的〕子宮内胎児発育は、超音波断層法を用い各種の growth parameter を計測することによって、その評価が可能である。一方、IUGRでは、特に肝臓の発育が悪いと言われている。そこで、超音波断層法によって、肝臓の発育を定量的に評価することを目的として胎児肝臓の計測を試みた。

〔方法〕妊娠19週から42週の合併症のない妊婦378名を対象として胎児肝臓の計測を試みた。計測は、縦断走査によって、肝臓を描出し、右横隔膜と肝右葉の先端開の長さ(L)、撮影したフィルムを用いて肝縦断面上、右葉の周囲長(RC)、面積(RA)、全縦断面の周囲長(WC)、面積(WA)を計測した。これらの計測値と妊娠週数、FAC、BPD、FFLとの関係について検討した。

〔成績〕肝臓の大きさを表わす各計測値は、妊娠の経過に伴い直線的に増加した。肝臓の大きさL、RC、RA、WC、WAと妊娠週数との相関係数は、0.93, 0.87, 0.75, 0.89, 0.90 (N=378, 240, 240, 230, 229: P<0.001)で両者の間に有意の相関がみられた。またL、WC、WAとFACとの相関係数は、0.88, 0.90, 0.85 (N=200, 201, 200: P<0.001)で、同様に両者の間に有意の相関がみられた。その他、肝臓の大きさを表わす各計測値とBPD、FFLとの間にも有意の相関がみられた。さらに、7名の低出生体重児の肝臓の計測値は、低値を示した。

〔結論〕胎児肝臓の大きさを表わす各計測値は、妊娠の経過に伴い直線的に増加し、FAC、BPD、FFLとの間に有意の相関がみられた。また、これらの計測値が、低出生体重児で低値を示したことから、胎児肝臓の計測は、胎児発育、肝臓の異常を検討する上で、有用であることが示唆された。

178 先天性心疾患及び胎児不整脈の出生前診断の Prospective Study に関する検討

平田市立病院

松永 功, 青木昭和

〔目的〕超音波断層法による先天性心疾患及び胎児不整脈の出生前診断に関する prospective な検討はほとんど認められない。今回、われわれはある特定の病院を選び、そこを受診する全妊婦を対象とし、先天性心疾患及び胎児不整脈の出生前診断に関する prospective な研究を行い、診断率及びその限界について検討することを目的とした。

〔方法〕昭和59年5月より昭和61年6月までに分娩した299名全例を対象とした。超音波断層法による出生前診断は、原則として妊娠20週、30週、36週以降の計3回行った。また、検査はすべて1人の検者によって行われた。超音波断層法により心構造の同定を行い、必要に応じて超音波Mモード法及び超音波ドプラー法を併用した。〔成績〕299例のうち3例の先天性心疾患(1.0%)及び12例の胎児不整脈(4.01%)が出生前に診断された。3例の先天性心疾患のうち、2例がmajor anomalyで1例がminor anomalyであった。2例のmajor anomalyの予後は不良であった。2例のsmall ventricular septal defectと1例のmoderate pulmonary stenosisは出生前に診断することができなかった。〔結論〕先天性心疾患の発生頻度は0.7~0.8%と言われており、今回の検討では出生前診断で1.0%の発見率を示した。3例のminor anomalyが出生前に診断することができなかった。胎児の期外収縮の頻度は1.7%と報告されており、今回の検討においては4.01%と有意に高い値を示した。今後、胎児心エコー法による先天性心疾患の出生前診断を日常の超音波検査に加えることにより、さらに発見率が高くなり、その周産期管理を容易にすることが示唆された。